



ミッシェル・ホリデイ 1987年生まれ、大平町在住。アメリカ モンタナ州 ビリングズ出身。趣味は読書など。好きな荒尾弁は「ぎゃん」。「荒尾は第二のふるさと」だそうです。

荒尾第四中学校区担当ALT（外国語指導助手）

MICHELLE HOLLIDAYさん

「日本語の発音の美しさに心奪われました」と、流ちょうな日本語で話すのは、ALTとして荒尾の小中学生に英語を教えるアメリカ出身のミッシェル・ホリデイさんです。

子どもの頃、日本のアニメがきっかけで、日本に興味を持つようになったミッシェルさん。英語とは異なる軽快なリズムと歌のように流れる発音に魅力を感じ、日本語の習得にまい進。日本語を知れば知るほど「日本で教師になりたい」と思いは強くなり、ALTになりました。

「少しでも英語を好きになってもらえたら」と、語るミッシェルさんの授業は英語に親しんでもらおうと工夫がいつぱい。授業では、クラスの個性に合わせて内容を変え、みんなが楽しめるように英語のゲームなども行っています。また、ハロウィンなどのイベントを取り入れて、「文化の違い」を楽しく学べるよう心掛けています。知らないというだけで、人は自分と違うものを排除してしまいがちです。しかし、相手の文化を知ること、自分の文化と

の違いを学び、自国文化の良さを再認識できます。

「国は違っても楽しいことで子どもが喜ぶのは同じ」と、話すミッシェルさん。思春期の子どもたちと接するとき、難しさを感じることもありますが、「日米の子どもに違いはないし、誰にでも悪い日はある」と、常に前向きに子どもたちと向き合っていました。

忙しくも充実した日々を送るミッシェルさんですが、「もう少しし日本の子どもたちに頑張してほしい」と、思うことも。日本とは異なり、アメリカには中学校から留年があります。そのため、多くのアメリカの子どもは何事にも一生懸命です。最初から諦めたり、途中で投げ出したりして、子どもたちがあらゆる可能性を失ってしまうことをミッシェルさんは心配しているのです。「勉強も含め、いろんなことに挑戦して視野を広げてほしい。そのための協力は惜しみません」と、頼もしい表情を見せました。

荒尾の子どもたちの笑顔のために今日も彼女は心を込めて教壇に立ちます。



1 初来日したときのミッシェルさんの母モニカさん。いつも温かく見守ってくれます。2 ハロウィンは、秋の収穫を祝うために、お菓子をもらい、仮装して悪霊を追い出す行事です。3 大学では文芸学を専攻していたミッシェルさん。去年、イギリスで共作の短編集を出版しました。表紙の金魚の絵はミッシェルさんのストーリーの内容に基づいています。